

# 若新 雄純

Wakashin Yujun [慶應義塾大学 特任准教授 / 株式会社NEWYOUTH 代表取締役]

ゆるいコミュニケーションが  
かたい社会をXする  
トランスフォーメーション

近年、DX(デジタルトランスフォーメーション)やGX(グリーントランスフォーメーション)という言葉が注目を集めている。トランスフォーメーションは変化や変革を意味するが、Xは同時に「cross:交差」という意味も持つため、デジタル技術や脱炭素技術により業務や生活が変革されることを意味する。人の営みを変革するという意味では、その根底にはコミュニケーションが存在するともいえる。「失われた30年」とも呼ばれる現在の硬直化した社会に風穴を開け、山積した課題に対応するにはこれまでの手法は通用しないのではないか。「ゆるいコミュニケーション」により、かたい社会に変化をつくる「創造的脱力」を提唱されてきた慶應義塾大学特任准教授の若新雄純氏にトランスフォーメーションのあるべき姿をたずねた。

## よく分からないものを無理やり定義しない「ゆるさ」

—「ゆるいコミュニケーション」とは何ですか。

2015年頃、お世話になっていた慶應義塾大学の教授から「若新がいつも言っている『ゆるい』っていいんじゃないの」と言われ、大学に「ゆるいコミュニケーション・ラボ」を作って運営したのが始まりです。「ゆるい」には、いろいろな意味が込められていますが、一つは曖昧なものや向き合うことです。僕らの生きている世界にある、さまざまな曖昧なものを、そのまま楽しむことが大事なのです。集まって活動すると、目的を持ってコミュニケーションしているつもりになり、その先のゴールを考えがちですが、目的を持っていなくても結果的に何かを生み出す事も多いと思います。そのような状態に注目しています。とくに目的を持たなくても意外な結果や想定外の事が起きることもある。そういう「ゆるさ」を大切にしていくと、あまり再現性はないのでモデル化することは難しいのですが、場合によっては新しい何かを創り出すこともある。偶然なのか必然なのか分かりませんが「ゆるいコミュニケーション」は、そういう創造性を持っていると思っています。

### CONTENTS

#### 特集：人と情報のトランスフォーメーション

SPECIAL INTERVIEW	
若新雄純 氏	1
SPECIAL EDITION	
うめきた外庭SQUARE	5
NAKEDヨルモウテ 2022 平安神宮	7
島根県立美術館	9
広島JPビルディング	11
双葉町役場	13
TO-REI 成長支援センター	15
TONO 家万博	17
ケンタッキーフライドチキン 南鹿児島店	19

くらしは文化	
高田世界館	21

\*本誌では略称を用いています。また、一部敬称は略させていただきます。  
表紙写真：平安神宮

# JKが「創発」した 鯖江市のまちづくり

— 女子高生による、まちづくりについてお聞かせください。

2014年、福井県鯖江市で地元のJK(女子高生)が主役になってまちづくりを行う実験的なプロジェクト「鯖江市役所JK課」を提案し、新しい公共事業として採択いただきました。福井県では、18歳で卒業した高校生の約6割が県外に出て行きます。しかし、4割の男子は地元に戻って来るのに対し、女子はその半分しか戻ってきません。地域の人口減少を解消するには彼女たちに残ってもらうことが大切です。そこでJKと市役所職員のコラボを考えたのです。



総務省の平成27年度「ふるさとづくり大賞」で、JK課の活動が評価され、鯖江市が総務大臣賞を受賞

まちづくりは、異なった立場の多くの人に関わり、多くのやり取りをして、触発されながら結果的に何かができあがります。これを専門的には「創発」と呼んでいます。「ゆるいまちづくり」というのは、人間が本来持つ創造的な部分、すなわち創発的なものを社会に実装することと言えるでしょう。まちづくりは創発的で柔軟性に富んだものだと分かっている、予測不可能な曖昧なものなので、プランニングしてしまいがちです。そこにJKたちを投入することによって、大人たちが無理やりゴールを描こうとしても描ききれない状態にしたかったのです。その結果、女子高生たちも、プロデューサーである僕でさえも想像しなかった「ゆるいまちづくり」ができました。結果的に、高校卒業でJK課も卒業した人の多くは福井県に残ったので、それはすごい成果ではありましたが、それも狙っていたわけではありません。想定していなかった結果の一つでしかありません。

## 分裂していた商店街を 和解に導いたJK課OG

— JK関わった事例をご紹介ください。

僕の中で印象的だったのが、大人たちの対立を解決した話です。当時、過去にあった確執がこじれて、鯖江市の商店街が2つに分裂しているという問題がありました。JK課を卒業した元女子高生たちが、活動が楽しかったので、卒業後も活動したいと、駅前でイベントを企画しました。JK課だけでなく、より多くの人を巻き込んでいくために商店街に声を掛けようとしたのです。大人なら、対立する両者に



若新 雄純氏

プロデューサー、株式会社NEWYOUTH 代表取締役、慶應義塾大学 特任准教授などを兼任。  
大学在学中に就労困難者支援を行う株式会社LITALICO(東証プライム上場)を共同創業し、2年弱取締役COOを務める。その後大学院を経て独立し、人材・組織開発支援などを行いながら歌舞伎町でバー経営するなど独自のスタイルを模索。現在は、大学でコミュニケーションデザインの研究ラボを運営しながら、企画プロデュース会社を運営。人間関係・コミュニケーション、感情表現、新しい働き方や組織、キャリア・教育、まちづくり、ライフデザインなどに関する実験的プロジェクトを企画・実施。テレビ朝日「ワイド!スクランブル」、TBS「Nスタ」など多数の情報番組にコメンテーターとして出演。東京と地元福井の2拠点で生活・活動中。慶應義塾大学大学院修了、修士(政策・メディア)。

根回しをして均等に声をかけるところですが、彼女たちは、そんな事情は知りません。事情を知っている僕たちは悩みましたが、対立している両者のところに事情を知らないJKが行って向き合うことも大事だと考え、詳しい事情は説明せずに、お願いに行ってもらいました。当然、商店街の人たちは動揺しました。しかし、大人たちも10代の女子に協力を求められ、仲違いしているから断るという訳にもいかずに、これを機に仲直りしようということになったのです。久しぶりに商店街が和解することになり、地元の新聞に「JK課の卒業生がきっかけで、分裂していた商店街が和解」という記事が写真付きで掲載されました。これは、市議員も含めて分裂していたので、長年政治家も解決できなかったことです。もともと、彼女たちはまちの対立を無くそうと問題解決を意図してやったわけではなく、まさにこれは偶然起きたことなのです。

## ニートが主役の会社で 培われた「胆力」

— ニートだけの会社を作られたそうですね。

NEET株式会社を作ったのは、鯖江市にJK課ができた前年です。働きたくない人、働かない人、働けない人という、社会からはみ出した人たちが集まって、自分たちが雇われずに、皆が取締役という立場でいられる会社を設立しました。そこで何が起るのか、僕も一員となって試してみようという実験でした。しかし、彼等と付き合い始めれば付き合うほど精神が消耗します。ほとんどのトラブルは、互いを誤解することから生じたすれ違いの連続です。相互誤解はニートたちの集まりだから生じているのではなく、視点を広げると日本の社会も

同様です。新型コロナウイルスでも、ワクチン派と反ワクチン派のように全く違う考えの人たちは、互いのことを異常だと思っています。ここで繰り返されているのは、大きなすれ違いがあり、互いを誤解して、理解しようとしないうちの縮図だと思うのです。なぜ、そんなに大変な思いまでして実験しているのかというと、僕は人間が集まった所に生じる人間関係という空間に、とても関心があるからです。このニートたちと関わった後に、鯖江市で女子高生たちと場を作ったのですが、市の職員さんはJKが何を考えているか怖いと言っていました。僕はちっとも怖くありません。そもそも何を考えているか分からないのが当たり前です。ニートたちが、私の人間関係と向き合う胆力を鍛えてくれたのでしょう。

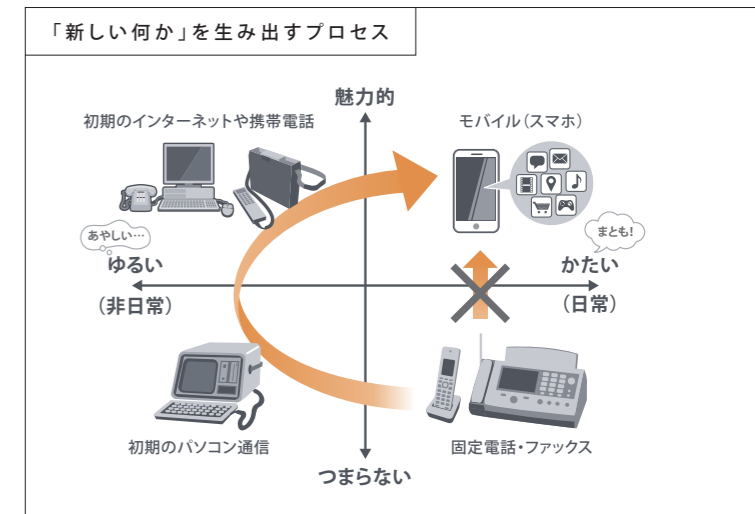
## 「新しい何か」を 生み出すプロセス

— 「ゆるさ」はどのような効果を生むのでしょうか。

新たに生み出されるものは、最初は必ず、うさんくさく映ります。それは人間が安心する要素の一つに、既視感があるからです。見たことがないものは、それが安全で使いやすい高性能であっても不安に思えます。インターネットも同じで、最初は既視感がなく、なんでつながっているんだ、どこの誰がやっているんだと不安でした。たとえば、最初にATMを扱う時も、そこに入金することが不安でしたよね。機械にお金を入れて通帳に印字されるのですが、誰もが最初は不安だったと思うのです。だけど、それが社会の中で定着していくと、僕らはそれが「かたく」まともなので、価値が明確なものだと安心するのです。何か新しいものを創り出そうとすると、既視感がない混沌と

した「ゆるい」状態を経験しなくてはなりません。まさに、パソコンやインターネットの初期は混沌そのものだったのです。「ゆるいコミュニケーション」は、創発的であるということと表裏一体です。混沌としたプロセスを楽しむことで実現する、必要混沌とも言える状態です。僕がやってきた仕事は、混沌を整理して明確な価値に変えるというより、混沌としているからこそ見えるもの、発見できることを増やすことだったと思います。

建築空間でも、新たな空間のしつらいを創り出すことは難しいですよ。僕たちは多くの建築を見てきているので、そのパターンから抜け出せない。建築空間に全く新しいコンセプトが投入された時、それを創り出した人は一旦、混沌とした状態にまで発想を戻していると思います。僕がやっているコミュニケーションにおける空間は、資材が必要なく、また作り替えることが容易なので、何度も壊しては作り替えることを繰り返せます。インターネットの歴史も、作っては壊すを繰り返してきたのではないのでしょうか。



## トランスフォーメーションは 混沌から生まれる

— 混沌が新しいものを生み出しているのですね。

最近、話題になっているDXについて言えば、Xはトランスフォーメーションですが、混沌が新しいものを創り出すという視点で捉えれば、私が取り組んできた事、そのものです。現状のDXは、システムを構築する側が、生産性が上がるデジタルツールを競い合って提案しているようです。しかしそれはデジタル化ではあっても、デジタルトランスフォーメーションではありません。Xになっていません。それは、混沌とした状況にしてしまうのが怖いからでしょう。何かを変革しようと思えば、それは予定調和の先にあるのではなく、先進的なデジタル技術を投入し、何かヤバいことになりそうな「あやしき」を創り出すことが必要で、その先にトランスフォーメーションがあるのだと思うのです。

— ありがとうございます。